

涙もきつと 一粒が限界

癌と聞けば恐ろしい病気のイメージだが、急激に状態が落ちるのは亡くなる1カ月ほど前。それまではふつうに笑い、食事を摂り、会話もする。関西人ならテレビにツッコミも入れるだろう。5年前、胃癌を患った祖母がそうだった。手術から2年後の2013年夏。再発だと告げられた。

「最期はどこで迎えたいですか？」
「私、90歳まで生きよう思っていますもん」

「そうじゃなくて！ほんまに最期はどこで迎えたいか考えておいた方がいい。遠い未来じゃなくて、近い未来だから」

普段は朗らかな雰囲気の医者だが、この時ばかりは真剣だった。その日の晩、一緒に夕飯を食べた。これが近い未来、永遠には続かないかと思うと不思議ではない。

「もう！先生あんなこと言うから私はショックやわ」
祖母はご飯をほおばり、テレビを

見て大笑い。

狐につままれた思いで在宅介護の準備をする。介護認定を受けさせアマネージャー、ヘルパー、在宅医、訪問看護師の手配をする。口が悪くきまぐれな祖母はヘルパーを追い返す。訪問看護師には「私、ひとりでも出来ますから！」と威嚇。頭が痛い。

だが、少しずつ状態が落ちてきている。草花を眺めたり、家の前を通りすぎる人と話すのが好きな祖母。いつもの日課で、庭の石段に腰をかけているのだが自力では立ち上がれなくなっていた。その頃からだろうか、ヘルパーや訪問看護師を自然に頼るようになった。

そのうち起きているより寝ている

時間が多くなる。同じ空間に居ながらお互いの住む世界が異なる感じだ。祖母はあやふやな意識の中で「あの世」と「この世」を行き来する。この世にしか居ない私は、それが辛くて涙が出てしまう。ふと目を覚ましたときが、この世に戻ってきたとき。その瞬間を狙い何気ない会話をする。途切れ途切れになる数分間のおしゃべりが貴重だ。体力は限界にきている。検査結果ではもう亡くなっているもおかしくない桁外れの数値に皆が驚く。

そんなある日、手術後を看てもらっている在宅医に「死にたい」ともらした。気力でかろうじて生きてくる祖母。

「もう、辛いんや……」

目を閉じてそのまま口をへの字につぐむ。目の端から口へと滴が流れおちる。涙もきつと一粒が限界。医者と私は一瞬、体が動けなかった。いつもだったら「何を言うてんの。まだまだやで」と、どちらかが言い返してたと思う。この時は無責任な気休めの言葉は投げかけたくなかった。どんな思いで、長い間寝たきりでいるのか。気力だけで死を待つ状態はどんなに辛いのか。

この翌朝、天国へと旅立つ。何かを言い残すといったドラマのようなものではなく、それはとても静かな最期だった。大好きなとんかつを食べ続け、たくさん笑い、しゃべり、泣いた88年間だった。

